

この瞑想の心持ちを劇曲『雲の柱』として沙漠のモーセを主人公として書きました。それは病床に於て試みを受けてゐる時に最も必要であります。それで目をつぶつてみようが、目をあけてみようが、どうでもいいのです。無関心にならうとすると、うれしい恍惚状態に這入らうと思つても這入れず、心の衛生の工夫の爲めに無関心の状態に這入ると、反つて与へられます。イエスが『生命の爲めに得んとするものは之を失ひ、生命の爲めに凡てのものを捨てるものは反つて之を得べし』と云はれたのは、全くこの心境であると云へませう。

この法悦とも云ふ可き経験を持続してゐると、礼拝の心に這入れます。これだけで高慢になり、自分は神の一部分などと考へるならば、それは、み恵の奥がわからないで、表門の入口を覗いて吃驚する人であつて、これは瞑想の体験の凡てではありませぬ。

心を掃き清めると、自から生命としての神を迎へ入れ申すことが出来るものだから、そこで神を礼拝し奉り、自分も十分神に抱かれてゐる喜びを神に感謝せねばならないのであります。その時は、神に無理な要求をしてはならない。創られたことの喜びをたゞ感謝すれば善いのであります。

その礼拝が持続せられると、自分が創られたのが、神の御栄の爲め——即ち生命の芸術の爲めであることがよく理解せられてくるのであります。この時に初めて祈つても善いのです。なぜなら、この時から我儘な祈りはなくなり祈りそのものが神の御栄の爲めであることが善くわかるからであります。この時の祈りは表現の祈りとなり、求めることは即ち創作の心持ちとなるのであります。此処に

光明の中に新天地の生れ出づる喜びが与へられるのであります。その心持を以つて風俗世界に現れてくる時に、キリストの心を始めて深く味ふことが出来るのであります。『天より降り、天に昇りしもの外に、父のことを知るものなし』と云つた心持は、そんな心持ちだと私は考へるのであります。

かうなつた心持ちでヨハネ伝をよむと、そこに書かれてゐる、イエスの事業、永生の問題、再生、光、活ける水等の、宗教的体験に基く色々な教訓が一々深い意味のあるものであることを知るのであります。

私は心の衛生から出發して、行動の実現に終る瞑想の工夫をかくは経験してゐます。

## 暴力の無能

### ——社会的発狂と武者修業道徳——

呪はれたる國民よ、大正十二年九月一日の晩から、関東の民衆は講談本の岩見重太郎その儘の真似をしてゐたではないか？

私が九月四日の朝、横浜の土地を踏んだ時に、私の得た第一の印象は、横浜人の凡てが発狂してゐると云ふことであつた。みんな抜身を持つて歩いたり、竹槍を取つて物凄い顔をして濶歩してゐるのであつた。

それを発狂といはないで何と云ふ？ 私は大正七年八月の米騒動

を詳しく研究して、社会的発狂の心理がどんな状態で進行するものであるかを秩序だつて調べてみた。そして此度のやうな大震災の時にはあつた気分になるのが当然だと思つた。

然し、大震災に際しても、社会的に発狂しないやうに平生から訓練されてゐたなら、何もこんどのやうなドサクサまぎれに誇大妄想狂の真似などしなくて善かつたのだ。

官憲に訓練がなく、民衆に訓練がないのだから仕末におへない。

官憲に訓練がないと云ふのは、今度の救済制度の不行届をみても善くわかるではないか、官憲は社会行動に対しては何等の訓練も見識も持つて居らないのである。彼等は国家は民衆そのものから成り立つてゐて、特権階級の国家ではないと云ふことを心得ないで居るのだ。それは民衆に対する犠牲的行動と社会を組織して行く能力とは全く力を欠いて居たのだ。彼等は上の命令で動く癖がついてゐるので、彼等自らの社会の爲めに、彼等自らが組織して行かねばならぬ社会であることを全く忘れて了つてゐたのである。私一人の眼に這入つたことだけでも、如何に官憲が罹災民を眼の前に置いて遅鈍であり怠業気分の仕事をしたかと云ふことを思はざるを得ない。

私は今日の政府が民衆そのものとあまりにかけ離れて居るといふことをつくづく思はざるを得なかつた。

民衆には自治が欠けてゐた。端てふために竹槍を引提げて仮装の敵を襲撃するとは実に面目次第もないことである。これが憲政が布かれて三十五年になる国であるかと思へば泣きたくなる。然し今度のドサクサの全責任は政府当局のみに負はず可きではない。民衆それ自身が醒めず、自らの社会を自らが組織しようとしてゐな

つた罰であると考へて少しも差支へない。平生から隣同士が會つても話の一つも交はしたことの無い穴居人種が、いざ鎌倉と云ふ時になつて、一緒に自警団を組織したところで、それに訓練のある筈がないではないか。況やその団体が互助を目的とせずして、むしろ殺戮を目的としたものであつた場合には、戦国時代の昔に帰るのはあたりまへである。

私は東京、横浜を歩いて見て、恐怖主義と云ふものゝ本質がどんなものであるかを善く理解した。九月四日に山城丸から上陸した連中は武装して三班になつて出発したが、武装などの嫌ひな私は、杖一つ持たないで船を抜け出た。或人は船のボーイから五十銭出して棒切れを買ひ求めた。或人は十連発のピストルに、ジャックナイフそれでも武器が足らぬと云つて先の尖つた火箸を右の手に持つて上つた。恐怖主義とは、水を見て驚く狂大病の一種である。それは極右党の恐怖主義にしても、極左党の恐怖主義にしても、全く同一である。人を恐怖せしめて自己満足をしようと云ふ人間は、人間を全く信じてゐないのである。先づ第一に自らを信じて居らないのだ。自分が悪人の素質を持ち、自分が人を斬る悪質を持つてゐるから、人も自分を斬ると信じて居るのである。

今度の自警団の暴行の多くは、恐怖の余りに人を斬つた種類のものゝ一種の発狂である。恐人病である。こちらが先に斬らなければ先のものが斬ると思ひ込んで居るものだから、質問も、訊問も何もしないで、人を斬つたのである。騎兵隊も、憲兵隊も、自警団とあまり変つたものではない。先に斬つた方が勝ちだと考へたのが、今度の恐人病のたゞりである。騎兵隊と憲兵隊の低能さは、自警団

と同じレベルにある。たゞそれは、比較的組織を持つてみたことと云ふに止まる。

極左党の恐怖主義者と、極右党の恐怖主義者が衝突して、力づくで国家組織を作つて行かうと云ふ芝居を眼のあたりに見て、暴力で支持されるものを国家と云ふなら、人間の社会生活は蟻の生理的分化国家よりも下等なものだと考へた。

社会と云ふものは、暴力の製造したものではない。征服の加味せられた国家、強者が弱者を征服して行かうと云ふ征服国家は、理想社会では無い。それが封建社会であらうが、専制国であらうが、資本主義国家であらうが、近頃流行の独裁制国家であらうが、若しくはサンヂカリスト、アナキストの主張する暴力による無主権社会への推移であらうが——それがどれだけ高尚な学理で裏付けられてあつても、暴力が真理の代用をなし得る社会国家と云ふものであるならば、私は否定する。社会と云ふものは、内質的に発芽する本能によつて始めて組立てられるものだ。生理的本能が男女の性愛を通じて家族制度を築き上げたと同じ道理で、智的本能が学校と科学協会を、情的本能が芸術協会と多くの劇場と展覧会と、観覧場を、そして意志本能が、善の目的の為に互助組合と多くの集團を形成するのである。それらが外部的抑圧によつて形成された場合には、自覚した社会とはならないで、奴隷社会となるのである。色々な理窟はあらうが、要するところ、純正社会は、暴力によらず、隷属によらず、強制によらず、自意識と、自由意志とによつて、本能的に、内質的に結合したものにして初めて意識せられた心理的社会を作り得るものであると云ふことが出来るのである。

恋愛に暴力が加はつたものを強姦と云ふ。社会本能は恋愛本能と同一質のものである。従つて恋愛が自由であらねばならぬと同時に社会本能も自由に成長せしめねばならぬ。それに暴力が加はつた場合に、それは強姦となる。

学校の教員が、生徒の智識を増加させる為に鞭を用ひてゐたのは極く最近迄のことであるが、低能児教育が発達してから、低能児に鞭の無用なことが発見せられた。

精神病院に鎖を用ひたことは極く近頃までである。ところが、今では、狂暴者に温浴の効用が発見せられて、鎖で繋ぐ代りに、二十四時間体温と同温度の水浴をやらせ、その中で尿尿をやらせてゐるでは無いが。

暴力は人間の内部の力の誘発には、何の効用も無い。私が今日まで社会本質の成育に暴力の無能を主張して来たのは、この為めである。

私は反社会性のもは隔離すれば善いと思ふ。隔離することを暴力とは言は無い。それは組織せられた社会の進化性と云ふ。

新しい社会にすぐ監獄と警察が無くなるのは私も思は無い。少くとも、今日の酒と梅毒と罪悪が全部無くならない以上、白痴、低能変質、発狂、反社会性人間は無数に起るであらうから、優種学的社会が完全に成立するまで、監獄も、警察もその存在の意義がある。然しその存在の意義も、決して暴力肯定の爲めでは無くして、白痴、低能、変質、発狂、反社会性人間を隔離する為めに存在すれば善いのである。

否、監獄などはベルギーでも、アメリカ合衆国でも、既に一つの

立派な社会病院、或は一つの完全な隔離式社会教育機関と転化しつつある今日、警察や監獄や軍隊が封建国家の概念で動いて居るのを見ると、全く情なくなる。

私は極右党の恐怖主義、即ち、騎兵隊や憲兵隊の恐怖主義を嗤ふと同時に極左党の恐怖主義をも嗤ひたい。

暴力などによつて捷ちかちたいと思つてゐる間は、憲兵隊や、騎兵隊とあまり変つたものではない。暴力で建てた社会は、暴力ですぐおき換へられるものである。

世界の宗教と、芸術と、教育と、科学と、道徳に対して、暴力がどれだけの貢献を成し遂げて居るであらうか？ それは破壊こそしたれ、何等の成果を齎して居らぬでは無いか！ ニュートンの引力説と、ライブニッツの微分数学と、ローレンツの物理と、アインスタインの相対原理と暴力との間に、何の關係があるか？ 私は社会革命家があまりに暴力の効果を信じ過ぎることを嗤ひたい。それは反動主義者が暴力を信ずると同一程度に可笑しなことである。暴力で建てた社会は奴隷社会であつて、それは真正な社会では無い。暴力革命家は口癖のやうに、資本主義が労働者の万人を殺して居るから、こちらも資本家を殺すのだと云ふ。それは如何にも正当であるかの如くに聞える。然しそれは復讐であつて進化では無い。眞の進化は資本家を労働者に轉換へさへすれば善いのではないか！ 轉換へることが出来なければ、資本主義社会の無秩序を汎労働主義組織の互助社会で置き換へ資本主義的搾取者を隔離すれば善いではないか！

極右党の恐怖主義者も、汎労働主義の互助社会を要求してゐるも

の、心持ちのあるところをよく考へるが善い。

然し、愈々の場合には、暴力に立たんとするものは、理想などを考へる暇などは無い。たゞ勝てば善いと云ふあせり気味と、闘争本能と云ふ弥次気分が、人間性の美しい方面を全部打ち消して、人間に獸類の互助本能をすら忘れしめ、人間の中でなければ発見出来ないやうな狂暴性に墮落せしめるのである。獅子などでも、殺人狂の人間程猛悪なものではない。それは動物学者のガドーなどが証明してゐる。

恐怖主義に病みつかれた人間は、獅子よりも、豹よりも怖い。

凡ての迫害は、この発狂心理の製造したものである。それは無智と無教育と、無節制と無訓練から起る。ロマ時代の耶蘇教の迫害、十六世紀から十八世紀にかけてのロマ旧教の新教徒プロテスタントに対する迫害、それらの宗教的迫害の歴史を見ても、最高善に向つて進む人間に対して暴力が如何に無力であるかを私は知つてゐる。

アナキズムでも、社会主義でも、それが社会科学に属する真理であれば、暴力で迫害しようが、武力で阻まうが、それが究竟の真理である以上、人間生活の進化の過程の上に、必ず進行して行くものと考へねばならない。従つてその殉教者は、その人が本質的真理を保持してゐるものであればある程、勝利はその人の手の上に置かれる。それが耶蘇の十字架の意味である。殉教者の血が一滴流れ出づる程、その真理はその土地に深く浸み込むものである。なぜなれば生命を賭してまでも護らねばならぬ真理は、妄動によつて動く暴力などで打壊されるもので無いからである。印度の聖雄カンデーなどの無暴力革命の受難の真理などは、全く此処にその本質があるので

あつて、此点は、私も社会運動に於て殺された大杉栄君に冷笑されながらも、主張して来たのである。然し真正のアナキズムは、暴力では来ない。愛と真理の無い暴力だけを信頼する世界に、大杉君などが考へたアナキズムの世界を打建てようなどと考へることは、それこそ夢遊病者である。

暴力が社会の進化に対して如何に無能であるかと云ふことを痛感してゐる私は、常に互助組合の發達を阻害して、真正の社会組織を怠り、そしていざと云つた場合に慌てふためいた兵隊さんと自警団の力を借りて秩序を保たなくてはならぬと云ふ日本の現状を、哀れと思ふものである。

精出して内輪同志喧嘩するが善い。羅馬を亡ぼしたのも内輪喧嘩であつた。日本人は外側に喧嘩をやめてから、内側の喧嘩が為たいたのであらう。互助本能の助成をやめて、争鬪本能（たださへ病的に流れんとしてゐる）の教育に務めるなら、善い社会が出来てあらう。凡ての者を剣道の達人にして、凡てに武装させるが善い。中学校ばかりでなしに小学校でも剣術を正科に入れ、徳川時代の武術修行の講談本を多くの民衆に読ませるが善い。さうすれば、いざと云ふ際に、立派な自警団が沢山出来るであらう。呪はれた国民よ、大正十二年九月一日の晩から、関東の民衆は講談本の岩見重太郎その儘の真似をしたのではないか！

愛と互助とを教へることを忘れ、東京市内には軍人と大警視の銅像ばかり建て、劍の長いものばかりを拜ませたものだから、その教育が完全に九月一日の試験にその効果を現はし、切捨御免の武者修業をするのは今日此時とばかりに竹槍をすぐ作つたのではないか！

電氣をつけた岩見重太郎よ！ 祝福せられた立憲国よ、おまへの

国には講談本と、封建時代の武士道の外に完全な思想はないと教へる師範学校出の訓導の外に、先生はないのか？ 愛と互助を教へることが危険思想であり、暴力を否定する社会運動者に刑事を尾行させねば安心でないかと考へる君子国なのか？ 五十年かゝつて教育した醜体を見よ！ 大、中、小学の教師よ、君等は何の面目があつて、この教育を成功ある教育だと云ふのか？

生命としての神の道を忘れ、誤魔化しの封建道徳に熱中して人類愛の本質を教へることを忘れたが故に、九月一日の醜体が起つたのではないか！

私は、自分が平素考へてゐたことがあまり露骨に眼前に展開するので、恐ろしくもあり悲しくもあつた。

日本の文明は仮装の文明である。今日までの教養は凡そ誤魔化しである。迫害も、暴力も、日本を善くする道ではない。極右党も、極左党も、悔改むるが善い。暴力による対峙は、日本のやうな小さい国では、共倒れを招く怖れがある。

眼を醒ませ、日本人よ。今は灰燼より蘇生すべき時だ。灰の中で兄弟塙かまに閉まく時ではない。相愛互助の世界は、争鬪の中からは永遠に産れない。眼隠しを取れ！ 日本は今、何処に立つて居るか？ その国の富の八分の一を失つてゐるではないか？ 働くものを中心として集まれ！ 搾取者を擁護する凡ての病的現象を取り去れよ。

そして相愛互助の世界に突進するが善い。繰返して私は云つておく。真理は暴力で枉かげられるものでもなければ、また、真理は暴力に打勝たれるものでもない。暴力で真理を蹴飛ばすものは、素足で

荆を蹴るやうなものである。

(一九二三・一〇・一三)

## 宗教と恋愛

人間の半分が強くても仕方が無い。今日のやうな弱い女性を連れてゐては、真正の文化に進むことは出来ない。弱ければ弱いで、強くせねばならぬ。

今日の時代は凡てを経済で計量せんとする。それで女性解放論者はいつても経済的解放を繰返す。私はそれに大賛成である。然し経済的解放だけで決して女性の解放が完またではない。真正の解放はたゞ富の平均分配などからくるだけのものではない。それは必要である。然しそれよりも大切なものがある。それは恋愛の解放である。

恋愛の自由によつて、低く落ちた人間の理想を高く引上げねばならぬ。即ち雌雄淘汰の力によつて、人間を高く引上げねばならぬ。今日の変質、発狂、低能、白痴、犯罪性の人間を雌雄淘汰によつて除去し、優種を得る工夫をせねばならぬ。

仮装的な富の力によつて恋愛を売るのでは無くして、眞実の人間を得るために恋せねばならぬ。

この恋愛の力は、眞正の改造の力である。そして、眞正に恋する力は、死を越え、病を越え、苦難を越え、死物を甦よらす力を持つてゐなければならぬ。それが童貞を要求する位のことには、何でも無い。眞に愛するものゝためににはポスポラス海峡をも遊び渡るアンドロアスの狂熱を持たねばならぬ。

即ち恋人の爲めには罪をも贖ひ、死をも厭いとは無い力を持たねばならぬ。之が宗教で無くて何であらう。

それは報酬の利念から来たものではない。功利主義から来たものでも無い。同情から来たものでも無い。それはたゞ人類を高めんとする、人間殿堂の礼拝から来た、実に奇しき努力である。

『神は愛なり』と使徒ヨハネが教へてくれる。愛するものはいつても生命の神に触れる。生命に触れること無くして愛し得るものではない。

婦人の使命は、種族の高挙にある。男性は個性化するが、婦人は常に民族化して行く。そこに婦人が今日までより多く犠牲を要求せられた理由がある。

私は婦人がその個性に目醒めてくると共に、一層宗教的となり、一層聖化して行くものであると思ふ。

婦人が参政権を持つことも必要であり、職業的に独立することも必要である。然し女は決して男になつてはならない。

女は善き娘、善き妻、善き母であらねばならぬ。女が善き娘、善き妻、善き母であることは、彼女が女代議士、女辯護士、女剣術使ひになることよりも、更に身自らに對し、また人類に對して大なる貢献をすることが出来る。

女が強くなると云ふことは、男子になると云ふことでは無い。男子の誤謬を訂正して、男子の低く落ちた理想を恋愛によつて淘汰して行くだけの強さを持たねばならぬ。この力は生命の力といふものである。それが即ち宗教であるのだ。

宗教と生命とを別物に考へる人は、さう考へることも勝手だ。然